

団体名	認定NPO法人全国のこども食堂支援センター・むすびえ	活動タイトル	こども食堂の「気になる子」の対応状況についての啓発・見守りネットワーク事業
<p align="center">望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p align="center">■活動風景</p>
<p>●地域の望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>当団体のビジョンは「こども食堂の支援を通じて、誰も取りこぼさない社会をつくる」である。コミュニティの衰退など様々な要因により人々の不安は高まっている中で、安心してほっとできる、より多くの人々が支え合う、より包摂的な地域・社会づくりが課題となっているし、そのような安全地帯（居場所、セーフティネット）の構築が人々のチャレンジを促し、地域と社会の活性化と発展を可能にする。そのような居場所が至るところに存在する日本社会を目指したい。</p>		<p>「行政学校・福祉専門職にこそ読んでほしい！ ある日のこども食堂 こども食堂エピソードブック2」</p> 
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>当団体は2つのミッションを掲げている。 個々のこども食堂や地域単位のネットワーク団体に寄付を仲介したり、保険衛生環境の向上を支援することで、こども食堂の質的向上と量的増加を図ることなど「こども食堂が全国のどこにでもあり、みんなが安心して行ける場所となるよう環境を整える」。 そして、より多くの企業・団体の多様なコミット（運営参加、寄付、協賛等々）を促し、提案・協力・協働することなど「こども食堂を通じて、多くの人たちが未来をつくる社会活動に参加できるようにする」。</p>		
<p>●団体の活動基盤</p>	<p>人材育成：プロジェクトマネジメントの資質を備えた自律的な「仕事人集団」を目指す。異質なセクターを架橋するためのマルチセクター人材が必要。 活動資金：全国を十分に動き回れる旅費、地域と社会の理解を促進するための十分な広報・啓発費、根拠となる調査研究費など、受益者負担でまかなえない領域をカバーする資金。 ナレッジ：こども食堂の多様な運営状況、課題感、想いを蓄積するコミュニケーションが必要。また、架橋していく先の企業等の社会貢献意識やCSRへの課題感などにも敏感でありたい。</p>		
<p align="center">■活動報告</p>		<p align="center">■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>	
<p>本助成事業では、経済的困難を初めとした様々な課題を抱えた「ちょっと気になる子」子どもや家族との関わりについて、25のこども食堂から70の事例をヒアリングし(2020年度事業)、その事例を基に「行政学校・福祉専門職にこそ読んでほしい！ ある日のこども食堂 こども食堂エピソードブック2」(冊子①)と「こども食堂ってどんなところ？」(パンフレット②)を作成・配布した。 本冊子(①)は、こども食堂が出会い、試行錯誤で見守り受け入れてきた「気になる子」の関わりを言語化・可視化し、こども食堂が新たなソーシャルセクターとして地域で果たしている役割や意義を同じ地域に住む子どもに関わる他のソーシャルセクター（行政・学校・福祉専門職）に発信することができた。 また、パンフレット(②)は、地域の一般住民の方に向けて、新しい取り組みである「こども食堂」がどのような所なのか、正しい理解で簡単に理解できる手に取ってもらいやすいパンフレットを作成し、全国の社会福祉協議会及び申し込みのあった希望者（団体・個人）に配布した。（ここでいう「正しい理解」とは、こども食堂が貧困困難の文脈だけでなく、地域における重要な交流拠点であり居場所であるということ。）</p>		<p>「こども食堂エピソードブック2」は、こども食堂が出会い、試行錯誤で受け入れてきた「気になる子」の関わりを言語化し、子どもに関わる既存のソーシャルセクターに対してこども食堂の地域で果たす役割や意義を発信することができた。申し込みのあった希望者59名（団体・個人）に対し、8月末時点で595冊を配布した。一方で、他のソーシャルセクターへの直接的な呼びかけや配布はできなかった。もっとも、個々のこども食堂が必要に応じて、その地域の福祉専門職や学校・行政とのつながりづくりのきっかけとして利用してもらうことを想定しているため、全国的、画一的に配布するよりもそれぞれの地域性を大切にした丁寧な関係づくりを用いられることを期待できる。読者からのリアクションとしても、「民生委員の集まり（勉強会）」で利用したい、「地域のこども食堂運営者に配布した」等が寄せられた。今後も追跡調査の対象とした。 一般住民の方に向けたパンフレットについては、地域福祉の柱である全国の社会福祉協議会（2073箇所）に10部ずつ、170名に対し9000部、合計で約29,000部を配布した。パンフレット単体に対するアンケート等を作成していないため、直接のリアクションは届いていないが、社会福祉協議会で配架されていたり、追加の申込みもあり、地域での需要がうかがえた。</p>	
<p align="center">■事業を通じて得られたノウハウ</p>		<p align="center">■望ましい社会状況を達成するための課題</p>	
<p>本年度の事業は、昨年度ヒアリングした中から、こども食堂が出会った「ちょっと気になる子」を中心として学校や行政、福祉専門職との「連携」事例を取り上げた。前年度に行ったヒアリングに加えて、今回の冊子作成に当たり、追加でヒアリングを行ったところ、そうした関係機関との連携の形や課題も想定以上に様々あり、地域性が複雑に絡んでいることがわかった。 そして、本事業で予定していた地域の専門職とこども食堂運営者との「交流会」実施の前段階として、関係づくりのための調査や分析、成功事例の収集等が必須であると考えられた。そこで、さらに複数個所のこども食堂関係者にヒアリングを行った。専門職とのつながりに「課題がある」地域は、個別の事情や地域性も強く、より慎重に課題や原因を調査したうえで関係構築の戦略を立てながら丁寧かつ長期的な視点での関係づくりが必要不可欠であるとわかった。 よって、今後（来年度以降）は、この調査を中心に、地域で誰も取りこぼさないための子どもの見守りネットワーク形成のための作戦及び準備に時間をかけたいと考えている。</p>		<p>こども食堂の箇所数は全国6,000箇所を超え、コロナ禍であっても箇所数は増加している。それだけこども食堂が子どもや家族にとって大きな支えになっていることの証左であると考えられる。一方で、こども食堂という言葉の認知度は8割を超えているものの、その実態が詳しく知られていないとは言えない。特に本事業が焦点を当てた「ちょっと気になる子」の関わりに関しては、子どもに関わる専門職にはまだまだ知られていない。当団体がめざす「誰も取りこぼさない社会をつくる」ためには、まず小さな地域で子どもを見守り支える地域づくりが必要である。 そのため、左記課題を踏まえて、地域で子どもを見守るネットワークの形成のためには顔を合わせるイベント的な「交流会」だけでは足りず、その地域性（地域の成り立ちや歴史、児童福祉の考え方、地域ごとの子供に関する制度や条例）、他のソーシャルセクターの存在や関係値など様々な要因の分析や、それに基づいた長期的視点での丁寧な関係づくりが必要である。 よって、今後は、まずは地域の連携の課題から洗い出し分析・調査を中心に行っていく予定である。</p>	
<p align="center">■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>			<p align="center">この1年間の活動を通じて</p>
<p align="center">■受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			<p>こども食堂が地域で課題を抱える子ども達を試行錯誤で受け入れてきた実態や、地域における役割、意義を、地域住民や福祉専門職にも広く発信すること</p> <p align="right">を達成しました。</p> <p>本事業で作成した冊子を読んだ、元福祉専門職の方から「ケースワーカー時代に、長期間の不適切な養育環境により、社会から見放されていく子供達を見てきた、共通するのは、長期間にわたり孤立していたという点。こども食堂と出会えば、後のこの子達の問題は起こらなかったのではないかと、本心からそう思います」とのコメントをもらい、福祉専門職の方にこども食堂の地域での役割、意義を理解してもらえたことがわかった。</p>